# 刊行にあたって

川﨑忠文さんの追悼文集を発刊することになった経緯をまず述べたいと思います。

川﨑忠文さんは知る人ぞ知る図書、雑誌、資料の蒐集家で、自宅マンションにはこれらが処狭しとばかりに、かつきちんと整理、保存されておりました。死後この処理が大きな課題でしたが、ご遺族と相談のうえ、その処理を私、佐方信一さん、石井次雄さんが引き受けることになりました。二〇一一年三月から五回にわたって取り組み、基本的に労働問題・労働組合運動関係のものは労働運動総合研究所へ、その他の社会科学、人文科学系のものは中国の大学機関に日本の図書寄贈を斡旋している財団法人「日本科学協会」へそれぞれ提供しました。それでも膨大な書籍が残り、それらは古書店への売却処分と致しました。

2011年12月14日刊行。

この作業の過程で、川﨑さんが東洋大学、中央大学での非常勤講師としての仕事において、専任教員でもそこまではと思うほど講義をきちんと準備していたことがわかる諸資料や、大学教務課からの一切の諸文書、学生からの手紙などもファイル保存していたことがわかりました。また、

二〇〇七年六月の大原社研の『日本労働運動資料集成』編集作業終了後から、外国語文献の翻訳作業を計画的に進めていたこともわかりました。

そんなことに感動を覚え、それらの記録を含めて川崎さんの各種の業績や文章を残すことの必要を強く感じて、中央大学の学生時代から人生の最後まで深い交友を続けてきた春摘 智さん、江川 潤さん、水野 勝さん、それにいっしょに仕事をしてきた佐方信一さんと世話人会を作って、相談のうえ、追悼文集をまとめることに致しました。その後、世話人会には柳澤明朗さんにも参加していただきました。そして、川崎さんが残された論文、文章を第一部とし、彼の人生の節々に広くかかわった方々にお願いした回想、追悼の文章などを第二部とすることに致しました。さらに、編集には石井さん、飯島信吾さんのご協力をお願いすることにしました。

もうひとつ、二〇〇九年一二月一四日に川崎さんが亡くなられたことをどのようにして私たちが知ったかについて、大変悲しいことですが、記録しておきたいと思います。

まず、家族同様なお付き合いをしておられた沼田文子さんが、沼田家の忘年会の日程変更の件で川崎さんに連続して電話を入れても連絡がとれなかったことを大変気にやんでおられ（中央大学時代の友人間でも川崎さんとの連絡がとれなくなっていたことが心配されていたようです）、その忘年会に出席することになっていた私も一二月二一日になって、沼田さんにお電話をしました。そこで、川崎さんが参加する予定だった一六日の大原社会問題研究所の忘年会に欠席したため、日程変更の相談が出来ていないことを私がご報告したところ、川崎さんの「音信不通」が続いていることが分かり、「これは何か事故によるもの

に間違いない」という判断で一致しました。沼田さんは「警察への連絡を」と申されました。

すぐ、私は、佐方さんと連絡をとり、青梅市役所の独居高齢者対策の担当者に事情を説明して、緊急な対応を要請することを依頼しました。二二日、市の担当者がすぐに地元担当の民生委員とともに川﨑さんのマンションを訪問したところ、応答もなくドアを開けることが出来なかったために、警察に協力を要請し、夕刻、警察がマンション内に入って、亡くなっている川﨑さんを発見したのでした。

警察医の診断の結果、死因はクモ膜下出血で、死亡推定日時は、一二月一三日まで血圧測定結果とウオーキングの歩行数を川﨑さんが記録していること、新聞受け入れ箱に一四日付夕刊以降のものが残っていたことから、二〇〇九年一二月一四日朝の入浴直後とされました。遺体は、青梅警察署に移され、二三日、警察からの連絡で広島から上京された御親族の方々、五十嵐 仁さん、佐方さん、春摘さんが遺体の確認に立ち会いました。

そして、斎場の事情等から二三日通夜、二四日告別式（三四名列席）が青梅市の浄弘寺で行われ、荼毘に付されて、遺骨はその日にご親族とともに出身地広島市に帰り、現在、川﨑家の墓所に眠っております。

最後に、三回忌を迎えるに当たって、この書を川﨑忠文さんにささげるとともに、ご負担を引き受けてくださいましたご遺族と追悼文等ご協力いただいた方々に深く感謝申し上げます。

二〇一一年一一月

芹澤　寿良

# 高齢期に入って一〇年間の交友から

芹澤　寿良

川﨑忠文さんの存在と活動を私がはじめて知ったのは、彼が労働旬報社に勤務していた一九六〇年代の後半から七〇年代前半の未だ労働組合運動が一定の高揚過程にあった頃ではなかったかと思っている。結構、労働旬報社の方々と労働組合関係の人々との交流が何かと頻繁にあった頃で、そんななかでも黒縁のメガネを掛けた川﨑さんの健康的で、人なつこい笑顔は、印象的であった。しかし、議論し合うというようなことはなかった。

私は、定年退職して高知から東京に戻り、間もなく一九九九年に法政大学大原社会問題研究所の客員研究員として仕事をするようになったが、川﨑さんは、すでに多くの労働組合の運動史編纂の業績をもった研究者として研究所雑誌の編集実務を担っていて、研究所仲間の親しい付き合いが始まることになった。

それも高齢期に入ってからの一〇年間で終わったが、彼は地味で、質素、飾ることなく在りのままの自分で他人と真面目に付き合い、彼なりの人間らしい豊かな生活像を描いて

金閣寺で（右より川﨑さん、松風さん、芹澤さん、佐方さん、2009年10月）

いて計画的に日々生きていたのではと思っている。

彼は、旅行好きでドライバー歴が長かったようで、私を含め車を持たず、運転も出来ない他の仲間たちは、青梅を中心に奥多摩各地を最適のシーズンによく案内してもらい、彼が得意げに語る豊富なガイドに感心しながら、評判の温泉、酒、料理などを堪能させてもらった。こうして私に奥多摩の魅力を数十年振りに再認識させてくれたのであった。奥多摩湖の小河内ダムに出かけて帰路、相当の走行距離を記録していた彼の中古車が限界とばかりに動かなくなったことがあり、彼はたしかこれを最後に車の運転を止めたのではなかったかと思う。

二〇〇一年九月九日から一二日まで大原社研関係者四人（私、川﨑忠文、佐方信一、手島繁一）で私が案内人を務めて

、川﨑さん運転のレンタカーで台風直後の高知県内の旅をしたことがあった。高知空港から室戸岬、安芸市、南国市と快晴下、素晴らしい眺めの海岸線を走って高知市に宿泊（国際ホテル）。翌日は、高知城と市民の手による小さな平和資料館（「草の家」）を見学、訪問して、午後、本山町に入って初秋、紅葉が始まった四国山脈を走って池川町へ、青少年の山村留学施設「池川自然学園」のスタッフと交流、宿泊。翌日、道路事情で佐川町に戻り、大正町を通って、途中、山中の「道の駅」で思いがけず私の在職中にお世話になった県庁職員の知人に会うなどして西土佐村の四万十川沿岸に到着、地元学校跡地に設けられた共同学習施設・「四万十学舎」で責任者の元高校教員の方と実践されている平和教育のことなど長時間交流、懇談して宿泊。丁度この日にアメリカで９・11テロの国際的大事件が発生していて、翌朝になって初めて新聞報道で知り、大きな衝撃を受けたのであった。

その東京への影響を心配しながらも、予定通り朝の清流・四万十川へ元小学校長を務めた方が船頭役の小舟で出て、流域の美しい風景を観賞して中村市へ向かった。市内で天然うなぎの昼食を採って、午後一時三〇分スタート。これまた見事な景色の展開のなか、土佐湾沿岸の国道を佐賀町、大方町を走って、須崎市に入り、国道を離れて太平洋を見下ろせる絶景の横波ラインをスローに走って午後四時三〇分高知市に到着した。走行距離がどの位だったのか、最初から最後まで運転したのは川﨑さんだった。

私達三人は「本当にお疲れ様でした。有難う」と心から感謝したが、川﨑さんは「やー確かに疲れたなー、運転はもうたくさんだね」と笑顔で答えて、レンタカーを返しにいった。

その後、私と川﨑、佐方三人の友人である高知女子大教員の永山 誠君の接待を受けて歓談し、三人は9・11の緊張に包まれた東京の状況を確認して高知空港から最終便で帰京した。私は高知に残り、予定した幾つかを処理して一四日にＪＲで東京に戻った。忘れられない川﨑さんと共にした長い車の旅であった。